六　釜ヶ崎の町名は変わったが
住民の生活はどれほど変わったか

あいりん地区は昭和四十八年（一九七三年）十月三十一日まで、山王町一―四丁目、東田町、今池町、東入船町、西入船町、甲岸町、海道町、東萩町、曳船町、東四条、の十三町があった。現在は町名変更で山王町一―三丁目、太子一―二丁目、天下茶屋北一丁目、萩之茶屋一―三丁目、花園北一丁目というように呼称している。そして、行政当局では昭和三十六年九月よりこのブロックを「スラム的要素を内包する日雇労働者の町」と規定して、労働、民生福祉の両面からあいりん対策を打ち出し、その改革と取り組んでいる。

さて、この釜ヶ崎を訪ねるには、地下鉄・動物園前で下車してホームから外に出ると、もう目の前である。また、地下鉄・花園町を出て、萩之茶屋商店街から行く方法、国鉄環状線・新今宮駅からは愛隣総合センタービル横を通って向かう方法もある。地下鉄・動物園前から飛田本通りを通って入るのが、最もオーソドックスなコースであるが、そこはまだ序の口といってよかろう。

飛田本通りの入口は左側がテレビなどにも出る多くの芸能人を輩出した山王町一丁目、右側が太子一丁目（旧東田町一―一二番地）となっている。本通りの入口にはポン引きが昼間から出没し、周囲はなんとなく異様な雰囲気がただよっている。また、商店街は旧飛田遊廓に向かう客を迎えるようなカタチで、パチンコ屋、喫茶店、酒屋、スナック、めし屋、薬局、衣料店などが軒を連ねている。このあたり、すなわち山王町一―三丁目（旧山王町一―四丁目）太子一丁目（旧東田町）、天下茶屋北一一丁目（今池町）周辺は、太平洋戦争中、B29の爆撃からかろうじて免れたところである。従って木造住宅が多く、町なみはかなり古いといってよかろう。

飛田本通りは問題があるにしても、一応、商店街として、それなりのにぎわいを見せているが、いったん、裏通りに入るとアスファルトは痛み、ところによってはなんともいいようのない臭気が一面にただよっている。なかでも、山王町一帯は大正七年、飛田遊廓が開廓したときから、廓

の用心棒たちが住みついていたところであり、現在でもいろいろな犯罪の多発地域でもある。日雇労働者は旧今宮スラムといわれている釜ヶ崎の中心部と違って、それほど多くはないが、世帯持ち労働者、水商売など、日雇労働者と同じように保障されない労働を提供する女性たちが多数、居住している。昭和四十七年（一九七二年）五月、千日前のアルサロ「プレイタウン」で史上まれなビル火災が起きたときでも、この町から三人のママさんホステスの犠牲者を出している。こうして恵まれない生活のなかでも、なんとか世帯が持てる環境にあるためか、町内には内科、外科、産婦人科、歯科に至るまでの各科診療所があり、市場、銭湯、市立保育所などもかろうじて確保されている。だが、それぞれの通りは電線がまるで蜘蛛の糸のように無秩序、無計画に張りめぐらされており、見るからに町全体が漏電の危険性にさらされているようにさえ感じるのである。

この町の最も深刻な問題は、なんといっても山王町一―二丁目（旧山王町一―三丁目）にある売春婦や男娼の巣窟、それに山王町三丁目（旧山王町四丁目）の飛田遊廓における売春行為であろう。山王町一―二丁目付近の旅館や民家を根城とする売春婦や男娼たちは一〇〇人とも、二〇〇人ともいわれている。このような汚濁のなかで働く売春婦問題もさることながら、男娼の場合は「オカマ」といわれて、世間からはさげすまれ、最低の人種扱いにされているが、いわゆる、

生来的な変態者は少なく、実は妻の不貞や蒸発、離婚などによって女性不信がこうじた結果、身を沈めた人が多いといわれている。たとえ、転落の原因が女性不信という個人的理由によるものであったとしても、この人たちも一人の人間なのだから、日雇労働者のように騒ぎを起こさなくても、元の男に帰してやって立派に社会復帰させてやらねばならない。やっかいなことは、こうした売春行為者は精神的に一人立ちが困難な状態になっている場合が多く、そういった意味からも、今後いかに保護し、更生させてゆくかが重要な問題となってくることだろう。

この山王町一―二丁目(旧山王町一―三丁目)から少し南に下って、旭通り商店街を横切り、山王町三丁目(旧山王町四丁目)に入るとかつて天下にその名をはせた、約二万坪の敷地を擁する歓楽街「旧飛田遊廓」がある。そこではいまでも赤いネオンが点滅し、約五〇軒の旧妓楼(きろう)が表看板は一応「アルバイト料亭」というカタチで営業を続けている。もちろん、料理を出さない料亭であることはいうまでもない。ここに通う客はどちらかというと、釜ヶ崎の労働者より、大阪市内の会社に通勤するサラリーマンだといわれている。そして、現在ここで働く女性たちは、最近になって地方から出てきた集団就職の脱落者がふえてきたといわれている。いずれにしても、この旧飛田遊廓ほど派手に客引きしている歓楽街は、わが国には例がないといわれていたが、昭和

四十八年(一九七三年)九月、大阪府警本部のいっせい手入れで、料理組合の方では以後、自粛を申し合わせ、ハデなネオンも下ろすことになった。

ところが、この山王町一帯は「釜ヶ崎」とはいわないが、一応「あいりん地区」に指定されている。しかし、今日に至っても何の「あいりん対策」も打ち出されてはおらず、そういった意味でも、釜ヶ崎と同様の地域といってよかろう。さらに、近くこの山王町一―三丁目にかけて「阪神高速道路・松原線」が、高架で開通することになるが、そのときは、車の排気ガスで町じゅうの空気が汚染される恐れがある。そうなれば、上も下も大変な「あいりん地区」ということになろう。

地下鉄動物園前から飛田本通りに入らずに西に下って霞町交差点に至り、そこから左折して国道津守阿倍野線の方向にすすんでいくと、やがて民生福祉の諸機関がある「市立愛隣会館」に至るのである。このあたりも外観は立派なマンモスドヤが林立しているが、かつてはとてもひどかった町で昭和三十六年(一九六一年)八月、第一回の「釜ヶ崎騒動」が起きたところでもある。

さて、五階建ての市立愛隣会館には騒動の結果つくられた「あいりん銀行」「あいりん保育園」「あいりん小・中学校」「西成保健所分室」などの他、昭和四十七年(一九七二年)九月、大阪市

北区天六から移ってきた「大阪市立中央厚生相談所」が入っている。

ここからさらに五〇メートルも下って、南海電鉄天下茶屋線の踏切りを渡ると、信号がないのに人が通っているときまって行儀よく車が止まる、わが国でも例を見ないすてきな横断歩道がある。それは、万一ここで通行人をはねたりすると、第一回の騒動のときのように、どんなにエスカレートしていくかわからないことを、大阪の運転手ならだれでも、よく知っているからである。どのようなカタチにしろ、人が車に対して絶対的な優位を保っていることは、誠にけっこうなことである。

さて、ここからもう一度、霞町交差点に帰り、そこから緑と黄のチンチン電車が走る南海電鉄阪堺線の踏切を横断して、旧住吉街道（通称釜ヶ崎銀座）に足を向けると、簡易宿、酒屋、めし屋などが軒を連ねている。このあたりは昭和初期に作家の武田麟太郎がその著書『釜ヶ崎』で、「カツテ、幾人カノ外来者が、案内人ナクシテ、コノ密集地域ノ奥深ク迷ヒ込ミ、ソノママ行方不明トナリシ事ノアリシヲ聞ク……」と、書いたところでもある。そこは「旧今宮スラム」といわれている地域だけあって、現在でも臭気は満ちあちこちに放痰（ほうたん）が行なわれ、アスファルトも痛んで、そのすさみ方は激しい。昭和四十八年（一九七三年）の初めから行政当局はこの旧住吉街道の道路脇に、八二本のいちょうを植樹して、緑化作戦に踏み切ったのだが、すでにそのなかの

二十数本は無残にも根元から折られてしまっている。しかし、残った六〇本近くはいますくすくと成長して、鮮かな緑の若葉をつけている。

この旧住吉街道の入口付近は町名でいうと、萩之茶屋一丁目（旧東入船町）となっており通称「ションベン横丁」と呼ぶ小さな広場があるところから、西成警察署前を通って萩之茶屋商店街付近までが萩之茶屋二丁目（旧海道町）となっている。しかし、「釜ヶ崎銀座」とも呼ばれているこの通りには、昼間から酒に飲まれた人が大の字になって寝ころんでいることもある。もっと驚かされるのは、西成警察署の入口で昼間から寝ていることである。しかし、よく考えてみるとここなら物を盗られる心配がなくいちばん安全だからでもある。また、パチンコ屋や飲食店があり比較的にぎわっている萩之茶屋商店街を横切って、釜ヶ崎名所の一つである東萩町公園（通称三角公園）に到着するとそこはもう一つきびしい。だれが見てもこれ以上、荒廃した公園はわが国にないといって断言することだろう。

釜ヶ崎名物の「ドヤ」と呼ぶ簡易旅館が密集しているのは、釜ヶ崎銀座の入口付近からマンモスビルのある愛隣総合センターがある萩之茶屋一丁目（旧東入船町、旧西入船町）、新築された西成市民館がある萩之茶屋二丁目（旧甲岸町）にかけてである。この一角にあるドヤの多くが外観は立派なホテルに変身したが、いったん内部に入ると天上は極端に低く、三畳の小部屋がまる

で蜂の巣のように密集している。

もちろん、不法建築ではないが、火災でも発生すると大惨事にならないかという懸念さえ抱くことがある。事実、昭和四十四年（一九六九年）七月、この近くにあった「宝ホテル」というドヤの火災で、逃げ場を失った労働者が多数、死亡している。普通なら犠牲者を出すような火災でなかったのであるが、その構造が袋小路のようになっており、非常階段もなかったことからこのような不幸な結果を招いたのである。

また、古本や古物をあきなう古物商、露天商が多いのもこの一帯であるが、そのなかでよく売れているのは古い週刊誌のほか、古い作業服、ワイシャツといった男物である。古い週刊誌は家庭もなく、テレビもない簡易宿の狭い部屋のなかで孤独をまぎらわすために読まれ、古い作業服は日々の糧を稼ぎに出るための鎧として求められている。古い背広もときたま出ているようであるが、今日でもまだ使い捨てが改まらないわが国にあって、このように本当に資源が大切にされているのはわが国では釜ヶ崎だけである。

新聞でもよく書かれている釜ヶ崎のノミ行為は、三角公園の一隅と萩之茶屋三丁目（旧海道町、旧東萩町）の路上で行なわれている。ここでノミ行為の水上げは一日でざっと約一四〇〇万円だ

といわれている。しかし、警察が何回手入れしても根絶することができず、逮捕されるのはいつもその手先ばかりで、本当の胴元はどこのだれかは判明しないと聞いている。だが、府警機動隊が動員されて本格的に手入れするときは、東萩公園をずっと遠まきにしていって、まるで網で魚を取るようにして検挙していくのである。

貧しい人のレジャーというと、こういう路上トバクとか、パチンコといったものしかないわけだが、ここで実際にノミ行為をやめさせようという気があれば、まず行政当局の姿勢から改めさせなければならない。すなわち、わが国の各地では地方自治体によって競輪、競馬、競艇などのレースが開かれているが、こういった公営ギャンブルが続けられている限り、釜ヶ崎でのノミ行為は跡を絶つことはないであろう。それは基本的にはここが貧しいからであるが、だからといって厳しく取り締まっても、電波に乗ったレース情報が、釜ヶ崎だけを避けて通ってはくれないからである。人の心を迷わせ、貧しい人をさらに貧しくし、引いては家庭生活を崩壊に導くような公営ギャンブルは、即刻、中止してもらわねばならない。それは釜ヶ崎の人たちの再起を妨げるだけでなく、釜ヶ崎人口をこれ以上ふやさないためにも、また、組関係の人たちにさらに罪を重ねさせないためにも、その中止はすでに社会的要請となっている。そして、お隣の国「人民中国」ではこんなふざけた遊びなどはないことも、付記しておかねばならない。

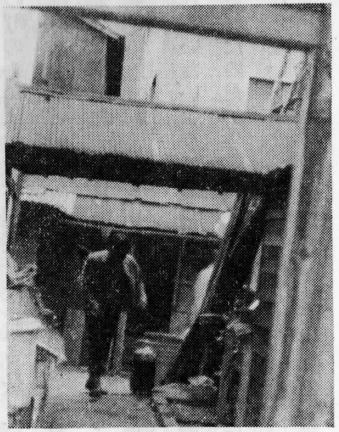
このギャンブルのさかんな東萩町公園の西側一帯――すなわち、萩之茶屋三丁目(旧東萩町)界隈は、また簡易宿、めし屋、酒屋、喫茶店、古物商、電器店などが軒を連ねている。また、いまにも崩れ落ちそうな古いアパートが林立しているし、ひところ、マスコミで騒がれた赤軍派のラーメン屋「勝浦食堂」もここにある。この付近は朝早くか、夜遅くに三人組の「西成強盗」が出没することがあり、「あいりん地区」のなかでも最も危険度の高い、すさんだ地域ということができる。

逆にここも「あいりん地区」かとさえ思えるほど平穏なのが、天下茶屋北二丁目(旧曳船町)である。緑の芝の代わりに石ころやゴミが散らばり、これ以上荒廃しようがないともいえる東萩町公園から、南海電鉄天下茶屋線の踏切を越えた南側の一角がそれであるが、この町には古い民家も立ち並び、あらゆる面において、比較的安定した層が居住しているブロックである。

釜ヶ崎の中心部から少し西よりのところを南北に、難波と和歌山を結ぶ南海電鉄本線が高架で走っている。この高架下がかつては釜ヶ崎にいる無宿民の宿となっていた。さて、新今宮駅に近いこの南海本線沿いにあるマンモスビルが、例の「愛隣総合センター」と「市営萩之茶屋住宅」である。そして、この付近一帯はセンターを中心に「あいりん小・中学校」を建設するなど、急ピッチで再開発がすすめられている。近い将来、釜ヶ崎の中心は、この一角に移るとさえいわれ

ている。

また、このセンターと反対側の南海本線西側が、花園北一丁目(旧東四条)という町名になっており、ここも「あいりん地区」の一部をなす地域となっている。この地域には一部工場のほか、簡易宿、日払いアパート、それに戦後、間もなく建ったであろうと思われるトタン吹きのバラック長屋などが点在している。バラック長屋の構造はもちろん共同炊事、共同便所であり、各室は三畳の小部屋からなっている。ところが、この小部屋は隣室と薄黒く汚れた板壁一枚で仕切られ、内部は採光や通風は全くない。じめじめとしていて、梅雨どきにもなると、まるで真夏のように不快指数が高くなり、心身ともに耐えられなくなってくる。ところが、各室をよく見ていると一人住まいはほとんどなく、たいがい二人以上で多いところでは家族四、五人が、まるで折り重なるようになって寝ている場合がある。ここでしばらく暮らしていたある人は「釜ヶ崎で騒ぎが起こる一つの理由が、なんとなくわかったような気がする」とさえいっていた。しかし、



共同炊事・便所のバラック

この町の一角はすでに大阪市に買収され、公有地となっているので、近い将来、こうした不良住宅は撤去され、何らかの施設が手当てされることになるであろう。

また、花園北一丁目には、南海本線に沿って「市立今宮中学校」があり、さらにその南側に、「四条ヶ辻公園」がある。この公園はドヤ街から少しはなれているためか、住民にはあまり利用されていないようである。いずれにしろ、「東四条」という町名から「花園町」という町名に変更されたのだから、名は体を現わすの例えどおり、町名にふさわしい美しい町となってもらわねばならない。

「あいりん地区」全体を見ていくと、山王町一帯、太子一―二丁目（旧東田町、今池町）においても、それなりに問題は山積しているが、「旧今宮スラム」といわれていた釜ヶ崎地区は、今日なお「戦災復興地域」に指定されており、いまだ戦後処理がなされていないまま捨て去られているといってよい。そして、あいりん地区内には公称、約四万五〇〇〇人の人口が、わずか一握りの地にひしめき合って暮らしているのだが、うち約一万九〇〇〇人が日雇労働者だといわれている。また、この約一万九〇〇〇人の日雇労働者のうち、八五パーセントが単身者であり、残る一五パーセントが世帯持ちである。単身者が多いということは、それだけ流動性が高いというこ

とのほか、騒ぎが起こりやすいということも意味している。事実、ここでは飯場に長期間、出かせぎに行ったり、さらに他の地域に移動するなど、一日一〇〇〇人単位で流動している。そのなかには釜ヶ崎を当座をしのぐ仮の宿としている人もずいぶんといる。このような人はこの町に対する愛情が持ち切れず、旅の恥はかき捨てということで、ますます町を汚している面もあることを、見逃すことはできない。

また、あいりん地区に居住する人口についての見解もさまざまで、愛隣総合センタービルのなかにある「大阪社会医療センター」の院長本田良寛氏は、四万五〇〇〇人という説より一万人も多い五万五〇〇〇人と見ている。事実、正月やお盆には釜ヶ崎を故郷のようにして、飯場から帰ってくる労働者が多いので、ピーク時にはこのような数字になるかもしれない。仮に、本田氏のいう数字が正しいとすると、公園、道路などのオープンスペースも含めて、一人当たりの占有面積はわずか畳二枚（三・三平方メートル）という勘定になる。いずれにしても、あいりん地区はわが国はおろか、世界でも例のない超過密ブロックを形成しており、しかも、なお漸増の方向をたどっている。

さらに、関係筋から聞いたところによると、釜ヶ崎にきている人たちの教育水準はそれほど高くはなく、新制中学校、旧制高等小学校卒が最も多くて、次いで新制高校、旧制中学校卒という

順になっている。旧制高校、大学卒という人たちはほとんど見られず、現代社会を構成しているエリートたちとは、全く無縁の社会となっている。それとは別に、ここには戦争のために義務教育が受けられず、このため新聞も読めず、手紙も書けないという状態で、生活しているケースもよく見受ける。そして、文字が書けないということから、長く住んでいても住民登録もせず、結婚していても婚姻届を出さないまま、暮らしている人もいる。この結果、市民として当然、得られる権利までが放棄されている場合があり、しかも、こういった文盲の人が三十代、四十代といったアダルト（成人）層にも、かなりいることは間違いないといってよい。

昭和四十七年末の行政当局の調査によると、あいりん地区内の宿泊施設は全部で五八二戸あり、飲食店は全部で五七三戸を数えている。

だが、宿泊施設といっても寝台車のような蚕棚式のベッドハウスから、「○○マンション」、「△△ホテル」と名付けたマンモスドヤまで、それは実にさまざまである。宿泊料はその日払いがほとんどで、蚕棚式の一泊一二〇—一三〇円から、三畳小部屋の三三〇—三四〇円までがあり、一部蔦職などの高所得者は冷暖房完備の一泊七〇〇—八〇〇円クラスの部屋で暮らしている。もちろん、この宿泊料は「宿館」として見ると驚くべき安さである。しかし、客の多くは長期宿泊者であり、従って、宿館というより木賃宿、ないしは日払いアパートという形式になっている。

ただ、間借りやアパートと違う点は寝具を貸与してくれるということである。また、日払いアパートとして見ると、三畳の小部屋を借りて宿泊費が月平均一万円以上にもつくことになるのだから、日本住宅公団の賃貸住宅と比較すると、それは比べようもないほど高負担となっている。

飲食店は多くが家族労働を基盤とする零細な商店であるため、施設が劣悪であり、また、めし屋、喫茶店を除いてほとんどの飲食店がアルコール類を販売している。このアルコールもかつては、焼酎を炭酸で割った通称「バクダン」という酒であったが、今日では二級酒とビールがそれに取って替わっている。しかし、問題は早朝から酒、ビールを売っている店があることで、このことが日雇労働者の労働意欲を、裏面からそぐ結果となっている。のみならず、このアルコールが現在、二六〇〇人におよぶアルコール中毒患者がいる釜ヶ崎にとって、きわめて深刻な問題を投げかけていることは事実であり、本田良寛氏は医者という立場から「ともかく、朝から酒を売ることだけは何とか自粛してほしい」ということを、強く希望している。しかし、この理想が実現されるためには、零細な飲食店の立場も考えねばならず、また、業者のコンセンサスが得られて自粛されることになっても、ブロック内にある日本酒二七台、ビール二七台、洋酒五台の自動販売機も撤去させなければ、意味がなくなるということも、問題として残されることになるだろう。

また四万五〇〇〇人もの人口が居住し、これだけアルコールを売る飲食店があるにもかかわら

あいりん地区内の宿泊施設数

簡易宿	223
日払いアパート	286
一般アパート	46
その他	27
計	582

あいりん地区内の飲食店数

立ち飲み屋	164
酒類販売店	28
食　　堂	161
ホルモン屋	22
喫　茶　店	90
寿　し　屋	33
お好み屋	34
屋　　台	41
計	573

昭和47年12月調べ

ず、ブロック内には公衆便所がなんと七か所しかない。東萩町公園、海道公園、甲岸公園内にそれぞれ一か所、南海電鉄阪堺線の今池駅横と、「ションベン横丁」といわれている萩之茶屋二丁目(旧海道町二番地)にそれぞれ、一か所あるのみである。もちろん、住民も地方出身者が多く、市民的な生活感覚が欠如しているかもしれないが、公衆便所がこんなに少なければ、当然、道路や溝を利用せざるを得なくなる。あいりん地区全体の下水道の不備とともに、このことが町じゅうに臭気をただよわす結果となっている。また、ブロック内には焼却炉がないため、町の各所にゴミが山積しており、それらが腐敗して、臭気を放っていることも見逃せない。

営利的慰安施設は地下鉄動物園前から上がったところにある飛田本通りと、旧飛田遊廓に近い旭通りと、地下鉄花園町から今池にかけてある萩之茶屋本通りの三つの商店街に集中している。

例えば、一一軒もあるパチンコ店、二一軒もある麻雀店はほとんどがこの通りに沿ってあり、碁会所、遊技場のほか、いかがわしいバー、酒場もその周辺に点在している。こうした慰安施設が多いことも、釜ヶ崎が都市として持っている魅力の一つであって、テレビもない空虚な生活を送っている数多い単身労働者にとって、こうした施設が不可欠となっていることも事実である。

ただいえることは、高い宿泊料に加え、朝、昼、晩三食の外食、こうした慰安施設における浪費によって、その再起および社会復帰を著しく妨げている。そうしたものに対する反感、プロテストというものが、騒ぎのたびに無意識のうちにパチンコ店への投石というカタチで、表現されているといってもよかろう。

また、西成警察署は昭和四十七年度の一か年間に、西成区で発生した凶悪犯の五〇パーセント、粗暴犯の六三パーセント、窃盗犯の一九パーセント、知能犯（無銭飲食を含む）の三一パーセント、風俗犯の六八パーセント、その他の犯罪の二六パーセントを、この狭隘なあいりん地区内で検挙している。加えて、日雇労働者に対する無理就労事犯は五九件も摘発しているが、これらは一般社会で起きている「もち米」の買い占めや、大口脱税などと違って、ほとんどが貧困犯罪である。

昭和三十六年八月の騒動により、犯罪予防という健て前から初めて設置された西成警察署の「防犯コーナー」は、泥酔者、精神病者、家出人などの保護、家庭および病気治療の相談など、市役所の福祉厚生部門が担当すべきような仕事までタッチしている。それは地域性も鑑みて取られている当然の行動かもしれないが、それはまた犯罪および騒動の予防という域を越えるものではない。こうして見ていくと、ソフト面でもあいりん地区内における治安対策にはかなりの力が注がれているといえるだろう。

さらに関係筋では「釜ヶ崎は政治も宗教も不毛の地」という見方をしている。そして、赤軍派は日雇労働者となって民衆の中にとけこもうと努力をしているが、現実の生活はその日暮らしでもっと厳しく、崇高な理想や小むずかしい理論は絵にかいた餅といっしょで、必ずしもここでは通用するものではないと把握しているようである。しかし、政治が不毛といわれるのは、住民側にその原因があるだけではなく、政党の方も住民に選挙権を持っている人が少ないため、票田として扱っていなかったからでもある。

またあいりん地区内ではキリスト教、創価学会、天理教などの宗教が布教を続けているが、現世利益を主張する創価学会の場合を除いて、教勢はそれほど伸びてはいない。試みに、戦前の場合を見ると、浄土宗の四恩学園が隣保事業を、救世軍が売春婦の更生事業を、カトリックの愛徳

姉妹会が保育と医療事業を通して布教していたが、ブロック内で活動していたときはかえって伸びず、逆にここを離れてから大きな発展を見せている。それは釜ヶ崎での奉仕活動には収入がなく、かえって経済的な負担が重なるばかりであったことが主な原因であって、宗教の持っている論理が受け入れられなかったと見るのは、ある意味で宗教を知らない、かなり一方的な見解というべきではなかろうか。しかし、戦前と今日の釜ヶ崎の生活を比較すると、労働者が休むのは雨天の日を除いて、西成労働福祉センターが休む第一と第三の日曜日の月二回ぐらいだが、戦前と比較すると、それはそれなりにゆたかになってきている。従って、今日においてもなお「政治と宗教の不毛の地」といえるかどうかについては、後世の判断を待つしかないと考えるのである。

また、戦前の釜ヶ崎と戦後の釜ヶ崎、なかんずく現在の釜ヶ崎と比較してみるとき、この町にどのような大きな変化があったのだろうか。昭和初期から釜ヶ崎にきていた郡昇作氏は「戦前の釜ヶ崎は特に裏通りがひどかったように思います。いまからするとそれは想像もつかないほど、荒れていました」といっている。また、昭和八年（一九三三年）フランスからきて釜ヶ崎で奉仕していた愛徳姉妹会のカッタン修道女は、「戦前の釜ヶ崎はもっと女の人が多かったように思います。昭和四十五年秋にまたここに帰ってきたのですが、そのときは男の人が多いのに驚きまし

た」と、当時を懐古しながら話していた。昭和三十九年（一九六四年）から旧飛田遊廓に近い山王町三丁目で、保育所を運営しているドイツ人の宣教師E・ストロームさんは、「万国博を境にして、ドヤが木造からコンクリートづくりの高層建築に変わりました」と、青い目で見たままを述べている。さらに、ここに出たり入ったりして、六、七年間も過ごしたという日雇労働者の一人は「以前はもっと年寄りが多かったように思いますが、万博後は若い人がふえました」とビジュアルな面における変化をこう捉えて、話していた。たしかに、万国博があった七〇年を境として、何らかの変化が起きたことは事実といってよかろう。

「釜ヶ崎」が「あいりん地区」と、「木賃宿」が、「簡易宿」と呼び方が変わり、飲む酒が「バクダン」から「二級酒」になったといっても、そこに住む労働者の連帯感は相変わらず希薄であり、一人一人が毎日、だれとも交歓のない孤独な生活を送っている。そして、現在でも年間を通じて行路病者はなんと一五〇〇人以上を数えているし、変死人の数も一〇〇人に近い。さらに、ここで長生きする労働者は少なく、多くが不規則な生活とムリがたたって、五、六〇歳にもなると肝硬変や胃潰瘍で、私立の救急病院の冷たいベッドの上でひっそりと死んでいる。これは町のうわさで真偽のほどは定かでないが、こうして死亡した人は身元不明で遺体引取人がない場合、大学病院に送られホルマリンタンクのなかにつけられて、解剖されるのだと聞いたことがある。

もし、このことがうわさにすぎず、事実と著しく反するというのであれば、行政当局は住民に対してなんらかの釈明をしておく必要があろう。そうでなければ、釜ヶ崎の労働者は生きているときはもとより、死んでからでもその体は一握りの権力者によって切りきざまれ、彼らの利益のために供されるのだと思い込み、被害者意識はさらにつのることになるからである。

また、ブロック内には広島、長崎からきている約三〇—四〇名近い被爆患者がいて、いつ症状が現われるかを心配しながら、それを恐れて黙して語らない毎日を送っているといわれている。いうまでもなく、この人たちの本当の戦後処理は、本当にいったいいつなされるのであろうか。このように戦争のツメ跡は、いまだに釜ヶ崎の各所で発見することができるのである。

さらに、ドヤ生活者の子供たちの多くは片親育ちで、どちらかというと父子家庭という恵まれない環境で成長している。この子供たちは父親が帰ってくるのを夜遅くまで、三畳の小部屋で待っているわけだが、そこにはテレビもなく、読む本もない。まるで「子連れ狼」の大五郎のようにじっと我慢して生きているだけである。

釜ヶ崎はたしかに変わった。マンモスビルの愛隣総合センタービルも建ったし、総合病院の機能を持った大阪社会医療センターも開設された。四階建てのあいりん小・中学校の建設もすすみ、町なみは少しずつ変わりはじめている。しかし、隣人を意識しなくてもよいという雑踏の魅力、

匿名性・秘密性の魅力は頂点に達しているため、かえって住民は孤独で、不安な毎日を送っている。また、労働者の生活空間は作業場と釜ヶ崎を往復しているだけで、ただ食って、働いて、寝るだけの単調な暮らしが続いているのみである。むしろ、インビジュアルな面における変化は何も起きておらず、今日も、明日も、明後日も、貧しいどん底の生活が続くだけである。

七　人間性回復のための あいりん対策こそ急務

人は多くの場合、着ている服によって値打ちがつけられやすい。昭和三十六年（一九六一年）八月一日、釜ヶ崎騒動が起きてからあいりん対策が打ち出されたものの、それが遅々としてすすまなかった一つの理由は、釜ヶ崎の労働者が陽に焼け、汚れた作業服を着ていたからともいえる。そんなことあるものかと人はいうかもしれないが、実際、釜ヶ崎に入ると公務員や一般商店の人たちも、着ている服によってコトバ使いは違うし、態度も一変する。結局、関係筋においても長い間のうちに「あいつらには、この程度でよいのだ」という下げすんだ気持ちがまた起きて、次の騒ぎが起きるまで放置されたままになっていたのではあるまいか。こんなイタチゴッコが一〇年間近くも続いていたといってよかろう。